『論叢　国語教育学』の復刊

『論叢　国語教育学』は、創刊号を 1993（平成５）年３月に発刊した。広島大学大学院教育学研究科国語教育学研究室の大学院生・修了生を中心に、若い研究者の自主的な研究発表の場を持ちたいというのが、その主たる動機・背景であった。その後、第２号（1994 年４月）、第３号（1995 年 12 月）、第４号（1996 年３月）と、ほぼ１年に１冊ずつ順調に刊行を続けた。が、第５号（1,999 年３月）をもって、事実上、休刊を余儀なくされていた。

それから、かれこれ 10 年を経ているが、廃刊ではなくて休刊であるという意識を多くの者が持ち続けていた。と言うのも、この長い休刊の期間にあって、絶えず第 6 号の発刊を話題にし続けてきたからである。ただ復刊するとすれば、またすぐに休刊に追い込まれるような事態だけは避けなければならない。少しエネルギーを充填・蓄積して再刊をということになって、その機会を待ち続けていたというのがこの間の経緯である。そして、それが 10 年間を要したということである。このたび、ようやく機運が醸成し、広島的に表現するならば、「不死鳥のごとく」よみがえったのである。この表現が大袈裟なものにならず、実質もそうだと認めてもらえるかどうかは、今後の展開、一に私どもの努力・精進にかかっている。

この 10 年間で、国語教育の世界も、その様相が大きく変わってきている。国語教育研究者の人口は、着実に増え続けている。この間、おそらく倍増しているといっても、過言ではあるまい。その中心的存在である全国大学国語教育学会も、1200 人を擁する大きな学会に発展してきた。その機関誌「国語科教育」も、2001（平成 13）年度からは、それまでの年 1 冊の刊行から年 2 冊を刊行するようになった。その意味では、投稿の機会が増えたことにはなるが、連続登載の制限などもあって、これに合格し採録されることはなかなか厳しく、難しい。加えて、昨今は、大学等の研究機関の公募条件に、学会誌等の査読（レフェリー）つき論文が求められ、そうした意味でも、ますます優れた論文をより多く見てもらえる機会の確保が重要になってきている。国語教育学に関連する学会として、日本読書学会、日本教科教育学会、中国四国教育学会などの機関誌があるが、これらについてもその登載に当たって、状況の厳しさはほぼ同様である。こうした様々な背景から、ここに『論叢　国語教育学』を復刊させ、若い研究者の独創的な研究を育み、互いに切磋琢磨する中で成長することを願って再出発することにした。

幸いに、わが院生・修了生たちは、自らの研究に真摯に向かい、互いの研究に熱心に耳を傾ける。「寝る間も惜しんで」という表現があるが、そうした姿を見受けることも一再ではない。本復刊第１号（通巻 6 号）にも、それぞれが自ら課題に取り組み、考究を重ねて、渾身の力を込めて成った論文等 10 余編を掲載している。忌憚のないご指導・ご助言が得られるならば、励ましこれに過ぎるものはない。

2010（平成 22）年９月

広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座　　吉　田　裕　久